

2010年7月17日(土)盛岡みなみ教会・東京キリスト教学園学園デー講演 山口陽一

## 北からのキリスト教

龍馬の従弟沢辺琢磨と甥坂本直寛



沢辺琢磨 (1834～1913)

山本数馬(沢辺琢磨)は、土佐藩士山本代七の長男として生まれた。代七の弟八平は坂本家の婿となり直足と改名、その次男が龍馬(1835～1867)であるから、龍馬と数馬は年の近い従弟である。琢磨の母は武市半平太の妻富子の叔母である。江戸に出て鏡心明智流の桃井道場の師範代となり、幕末の江戸で龍馬と共に攘夷に奔走したが、1857年8月4日、田那村作八と共に佐州屋金八から奪った時計を質入した事件のために江戸を離れ、新潟で前島密に勧められて函館に至り、神明社の宮司沢辺悌之助の女婿となる。

アイヌ地のウスケシ(湾内の端)、室町時代から維新期の箱館にロシア領事館が置かれたのは1858年、翌年には聖堂が建てられ、1861年にはニコライが着任した。ニコライは体制化したロシア正教会において、国外宣教の志を抱いた稀有な人物で、日本に対して深い親愛の情をもって偉大な働きをした。当時の函館は、いわば北の長崎であり、蝦夷地警備のための津軽・南部両藩からの兵、その他有為の人々が集まっていた。ニコライは大館出身の木村謙斎から日本語はもとより、国史、儒教、神道、仏教、風俗習慣までを学び、国漢の読書ができるようになっていた。これは英学修業に於いて米英の学術を教えたプロテスタント宣教師にはない特徴であった<sup>1</sup>。

沢辺琢磨は、ロシア領事の子に剣を指南するうちにニコライを知り、彼こそ国家を害する禍根であると考え、これに論戦を挑み、その答弁によっては一刀両断にすべく訪問した。怒気満面、声を怒らし「爾の信ずる教法は邪教なれば、爾は我国をする者にあらずや」と問うと、ニコライは「さればなり、貴君はハリストス教の事を能く識り居らるか」、「未だ自ら識らざるのハリストス教を、何故に憎むべきの邪法教と名けらるか、もし自ら識らずんば、これを研究して、然る後に正邪如何を決すべきにあらずや」と問い返した<sup>2</sup>。ニコライの教えに耳を貸そうともせず、国を奪う者であると連呼したが、3日目

<sup>1</sup> 中村健之介訳『ニコライの見た幕末日本』(講談社学術文庫、1979年)は、1869年に一時帰国したニコライがロシアで発表した論文「キリスト教宣教師の観点から見た日本」である。また、中村健之介訳『明治の日本ハリストス正教会』(教文館、1993年)は、ニコライが1878年に東京で書いた「在日本ロシア宣教師団団長・掌院ニコライの正教宣教師協会評議会への報告書」である。中村健之介監訳『宣教師ニコライの全日記』(全9巻、教文館、2007年)は、1870年から1911年までの日記で、東北伝教の記録も多い。

<sup>2</sup> 石川喜三郎『日本正教伝道誌』日本正教会編輯局、1901年(近代日本キリスト教名著選集 第II期 キリスト教教派史篇10に復刻版、日本図書センター、2003年)、1巻pp31～32

の正午ごろ懐から紙を取り出し、聴いたことを筆記し始めた<sup>3</sup>。

やがて沢辺は、尊皇攘夷の志士・神主から一転、熱烈に信ずるようになり、奥州栗原郡出身の医師酒井篤礼に伝道を始める。しかし、温厚にして思慮深い酒井に論駁され、ニコライに尋ねては酒井に教えることが続いた。これが沢辺の教理研究に資することになる。一年ほどして酒井もニコライの教えを聴くようになる。沢辺は宮古の人浦野大蔵、函館の鈴木富治を信仰に導いた。1864年5月に密出国した新島七五三太(襄)に福士宇之吉を紹介したのは沢辺だった。

王政復古で函館の幕府奉行が更迭され、新政府の奉行着任にあたり、京都の公卿である奉行はキリシタンを厳しく圧迫するとの噂が広まり反耶感情が高まった。沢辺らは迫害と潜伏に備えて秘密裏に洗礼を受ける。1868年4月24日(慶応4年4月2日)、正教会最初の洗礼を受けた3人は、パウエル沢辺、イオアン酒井、イヤコフ浦野である。酒井の妻子、妻子を残した沢辺は従者と共に荒れ狂う海を3日かけて大間に渡り、酒井は恐山から郷里金成に帰り、沢辺と浦野は八戸を経て浦野の郷里に至る。ここから沢辺は遠野を経て南部と仙台の国境の関所で西国訛りをとがめられ拘留されたが、水沢、金成の酒井家を経て、仙台を避け石巻に至った。江戸行きの船があると聞き、気仙沼に至ったところで捕えられ、函館送還となった。人首、野辺地まで護送されたが、途中人首の関所では夜訪ねて来た役人に福音を語った。人首には後に正教会が設立される。

野辺地からアメリカ船で函館に戻った沢辺は、妻子と祖父の家に潜伏したが、迷惑を避けられず殉教も覚悟してニコライの下に戻った。しかし、戊辰戦争の混乱により、さらなる追求、新政府の知事による迫害もなく、むしろ伝道の好機が到来する。機を見たニコライは、1869年から71年にかけてロシアに帰国して日本伝道会社を設立し、以後東京に拠点を移すことになる。

函館に来ていた仙台藩の回天隊長金成善兵衛と新井常之進(奥邃)は沢辺から正教を学び、ニコライ離日後仙台に戻って同志を導く。高屋仲(イヤコフ・司祭)、小野莊五郎(イヲアン・司祭)、笹川定吉(ペトル・司祭)、大立目謙吾(ペトル・伝教師)らである。

1870年4月、敗残者への追求厳しい旧仙台藩士族に沢辺の手紙が届く。曰く「国家の恢復を謀らんがためには、人心の帰一を期せざるべからず、人心の帰一は真正の宗教に依らざるべからず、人民にして真正の宗教を信せば、人心の統一を得べく、人心統一せば何事か成らざらん、もしそれ、国家を憂ふるの赤心あらば、速に来函すべし」<sup>4</sup>

1870年5月から、ニコライが戻る1871年2月まで、沢辺を中心に新井、小野、笹川、大立目、津田徳之進(パウエル・伝教師)、影田孫一郎(マトフェイ・司祭)らは函館で正教を学び、また仙台に戻って伝道する。沢辺は刀を売り彼等の生活を支えた。沢辺はニコライがロシアから戻ると土佐に帰郷し、ニコライに上京を進言する。同年11月、小野、高屋、笹川は仙台の伝道に赴き、12月、アナトリイ司祭が函館に着任し、沢辺はニコライ上京の準備のため東京に赴く。そして、翌1872年1月にはニコライも横浜に着き、東京での伝道を開始した。東京での最初の受洗者は深川在住、司法省小録の高橋六郎(安川亨)の妻せい(工カテリナ)である。

一方、仙台では迫害が起こる。2月13日、仮会堂の小野の家で食事の沢辺は40人の捕吏に捕えられ入獄した。同日、笹川も自訴して入獄し、東京に向かった高屋も知らせを聞いて引き返し翌日逮捕された。他にも入獄者、取調べ、親類預け、遠国禁止などの処分を受けた者が140余名に及んだ。今田直胤、涌谷繁らは入獄者への差し入れなどに奔走した。今田も逮捕され外出を禁じられたが、変装して入獄者と家族の慰問を続けた。

<sup>3</sup> 『大主教ニコライ師事蹟』日本ハリストス正教会総務局、1936年、p29

<sup>4</sup> 石川喜三郎『日本正教伝道誌』1巻p65。同書は「沢辺の当年の信仰は、救贖の道に重きを置きしにあらざらず、其眼中ただ日本帝国あるのみなり」と評している。

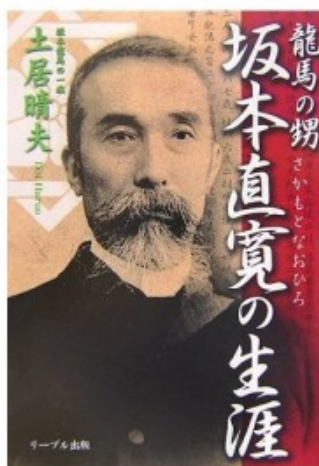
在京の小野が外務卿副島種臣に、旧仙台藩士信太夫らが太政官顧問フルベッキに訴え、宮城県参事塩谷良翰は彼らを放免することになる。5月28日に出獄した三人を迎え会堂で感謝の祈りが捧げられた。同じ時期、函館でも迫害が起こり影田、津田、酒井が入獄し5月に放免されている。同年10月酒井は出身地の水沢県に引き渡され、禁足を命じられるが金成、伊豆野、若宮などに伝道を行ない、伊豆野では千葉卓三郎が入信する。酒井はその後、東京、函館、八戸、福岡、三戸に伝道し、1874年1月に再びに召喚され県庁で取調べを受けた。千葉も神官・僧侶に訴えられ3ヶ月入獄した。彼は獄中で死刑囚を導き洗礼を授けている。獄中から書面を出したことを咎められさらに懲役百日に処されたが信徒たちは千葉のために弁償金を集め刑期満了前に釈放させた。酒井は伝道を止めなかったため、同年5月に80日の懲役を受けるが、これをもって水沢県の迫害は終わった。

東京のニコライは、1872年9月に駿河台の元火消屋敷、後の戸田邸を購入して現在の復活大聖堂（ニコライ堂）の基礎を据え、1873年9月最初の洗礼機密を執行した。

函館と東京を繋ぐ伝道線は、仙台、水沢から三戸、福岡、七戸、八戸、野辺地、そして盛岡、盛岡から花巻、土沢、大槌、釜石、山田、遠野へと伸びる。仙台からは高清水、築館、佐沼、桶谷、古川、さらには石巻、湊へ、あるいは山ノ目、金成、若柳に教会が設立されて行った。

1874年の布教会議で全国の伝教者となった沢辺は、翌明治8年、日本人として最初の司祭に任職された。彼は、宮城県佐沼、岩手県一関、福島県白河へ伝道したが、その実りは豊だった。1881年にニコライは東北を巡回している。白河を発ったのがユリウス暦で5月17日、現在の暦では29日である。白河は47人の信徒がいて前途有望、三本松を經由して18日福島、ここには活動的な会員が24人、大森、若松でも信徒を訪問し20日仙台に到着、ここには二人の司祭（小野、影田）がいて、信徒は545人。原ノ町138人、上下堤42人、福田、鹿島台、大松沢、川内にも信者がいる。22日石巻116人。23日古川、信徒63人で会堂もある。高清水160人会堂あり。26日佐沼319人会堂、石森、登米、米岡、南方にも信者がいる。27日若柳90人、十文字、伊豆野、石越、金沢、蝦島、沢辺の信徒を巡り、28日は酒井の郷里で70戸の信徒がいる金成に泊。一関20戸、山ノ目54人会堂、前沢、水沢、29日岩井堂11戸25人、人首24人、30日花巻、郡山、そして31に盛岡に着いている。132戸264人。このように、明治前期における東北での正教会の教勢はめざましく伸びた。

1898年、正教会は170教会、信徒25,231人となる。同年、日基・組合・美以の合計が215教会、31245人であった。沢辺は、晩年四谷正教会の司祭を務めた。龍馬より46年長く生き、青山霊園に葬られた。



坂本直寛 ( 1853 ~ 1911 )<sup>5</sup>

土佐国安芸郡安田村に高松順蔵、千鶴の次男として生まれる。母は坂本竜馬の長姉。竜馬暗殺の時14才、17才で伯父坂本権平（竜馬の兄）の養子となり南海男と改名。東京遊学を経て1876年5月から立志学舎に学び自由民権の理論と雄弁を身に着ける。この頃、ギリシャ正教教師の演説を学校で聴く。これが沢辺琢磨であると言われる。その後アッキンソンの説教を聴き、ノックスとは3日議論し、植村正久の教えを受け、1885年5月15日、片岡健吉、武市安哉らと共にノックスから受洗。この日、高知教会が信徒21名で設立された。強固に反対する母が、祈りにより十戒の小冊子を読んで偶像を捨てた経験が大きい。自由民権の理論家であり、1881年の「日本国憲法見込案」は日本国憲法の先駆とされる。

1884年直寛と改名。1887年、三大建白事件運動の総代の一人として上京し、保安条例により片岡健吉らと共に石川島の監獄に収容された。憲法発布の恩赦まで獄中で聖書を読み、国民の品性の重要性、政府のための祈りを学び、獄中で伝道し、拓殖事業を志す。

妻の水死、後妻の病死を乗り越え、1897年北海道北見のクネツプ原野で北光社農場を設立、水害被害者救済に奔走するが誤解され孤立、伊藤博文の政友会樹立を機に政界と絶縁。

1902年植村の勧めで伝道者となり、旭川日本基督教会に赴任、2年後に按手礼を受けた。その後は、日露戦争時の軍人伝道や十勝監獄の伝道に当たる。祈りに祈り、1906年から翌年にかけて十勝監獄、旭川でリバイバルが起こる。長野政雄は共に祈った親友だった。

自らも囚人となった経験のある坂本は囚人への同情厚く、罪の赦しの説教も鋭い。1907年11月に木村清松と行なった伝道では900名が涙ながらに聴き入り、15名が受洗、10月以来の受洗者は102名になった。

1909年、札幌の北辰教会（現在の札幌北一条教会）、朝鮮の龍山、そして函館での伝道を企てたが、1911年に札幌で召天。

---

<sup>5</sup> 土居晴夫編口語訳『坂本直寛自伝』燦葉出版社、1988年（原本は『予が信仰之経歴』教文館、1909年。リーブル出版から再版）。吉田曠三『龍馬復活』朝日新聞社、1985年